人とフランス語に出会って―

長与教会信徒　戸口民也さん

教皇フランシスコとフランスの社会学者ヴォルトンとの対話をまとめた『橋をつくるために』を教皇来日の2019年に発行。「翻訳作業はある意味〝脚色〟みたいなものです。フランス語のリズムやイントネーションから元の言葉がもつニュアンスまで含め、原文の意味するところをできるだけ伝えられるようにと思いつつ訳しています」

最近ではフランスのカトリック司祭、ジャック・フィリップ神父の本『心の平和』と『内的自由 信仰・希望・愛の力』を自ら出版した。「フィリップ神父の本の中でもこの2冊は特に優れた霊的著作だと思っています」

新型コロナウイルスの影響で、予定していた出版社の業績が厳しく、発行の目途が立たなくなった。「こうなったら自分でやるしかない」と、各種手続きを経て昨年7月に立ち上げたのが「戸口書店」。編集、校正、表紙のデザインをし、データを印刷所へ。実際に仕上がった本を手にしたときは感無量だったという。

小学時代の『少年少女世界文学全集』に始まり、中高時代は日本や外国の小説や戯曲を読みあさった。文学、演劇、映画に興味が尽きず、早稲田大学でフランス文学を専攻。勉学に励む中、悲劇作家ラシーヌ（1639-1699）や思想家・科学者のパスカル（1623-1692）に出会い、神の存在について考えるようになった。また、大学時代の恩師との出会いについても「陽気でとても明るい方で、カトリック信者との最初の本格的な出会いはその先生とご家族でした」と語る。

その後、縁あって長崎外国語短期大学（当時）に就職。「長崎でフランス語教師になる、しかもフランス語専攻があるなんて、ほんとうに恵まれていました。後から考えると〝み摂理〟ですね」

信仰への歩みは「人との出会いがなかったら無理でした」と振り返る。長与教会が献堂された1986年の12月に家族で受洗。「私にとって長与教会は自分の家みたいなものです。信仰というのはやっぱり共同体の中で生きて、伝えられていくものなんだと思います」

昨年4月から長与小教区評議会議長を務めている。研究者としても現役で、長いこと中断したままの〝宿題〟も。「約50年前にスタートしたフランス17世紀演劇研究会にずっと参加しています。〝宿題〟を仕上げることができたら石垣の石の一つくらいにはなるでしょうか。あとは若手が引き継いでくれたらいいと思っています」と笑う。

妻・容子（やすこ）さんとはよく行動を共にし、話しをするという。自身の信仰の歩みを綴った『パスカルに導かれて』は「戸口民也のウェブサイト」で読むことができる。長崎外国語大学名誉教授。神奈川県大和市生まれ。75歳。